

折 渡

——柏崎市久米・折渡遺跡発掘調査報告書——

1996

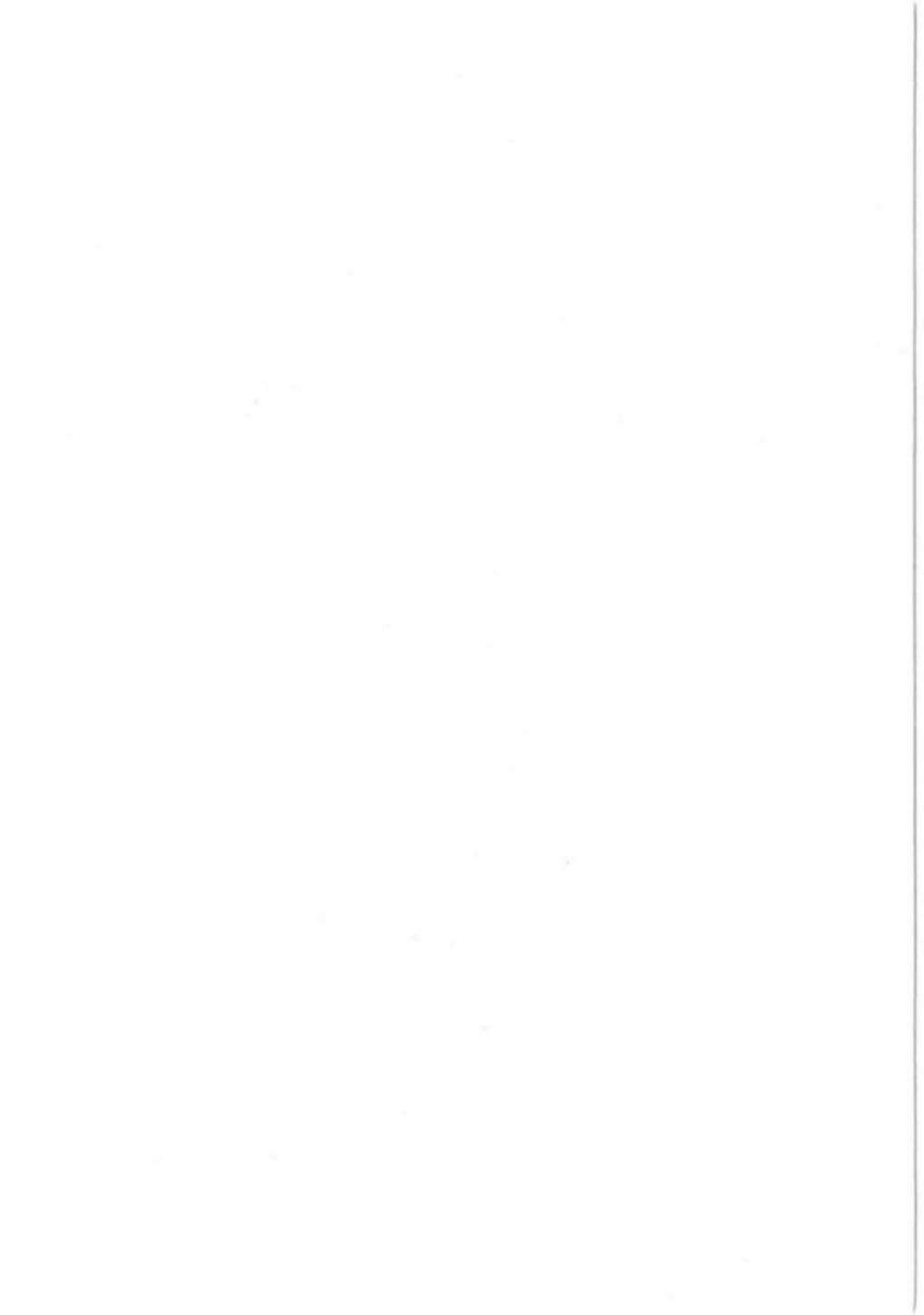
柏崎市教育委員会

折 渡

—柏崎市久米・折渡遺跡発掘調査報告書—
おりわたし

1996

柏崎市教育委員会



序

柏崎市は、海あり山ありの変化に富んだ地形をもつまちです。その中にあって、久米地区は山側に位置し、自然豊かな、静かで穏やかな環境のところです。ここは、冬は確かに多くの雪が積もりますが、春ともなれば山々には山菜、秋にはクリやドングリも多く、この地に暮らした縄文時代の人々もそれら自然の恵みとともに生きていたものであります。と言っても、決しておだやかな生活ばかりではなく、今回調査された倒木痕のように、木を倒すほどの大風との戦いもあったことでしょう。そして、そのような戦いを乗り越えたればこそ、今のわたしたちの暮らしがあるわけです。遺跡は我々にさまざまなことを教えてくれます。そして、それを後世に伝えしていくことが、現在の我々の責務と言えるであります。

本報告書は、柏崎市大字久米字折渡地内において行われた、ゴルフ場の造成工事に関連して事前に実施された発掘調査の記録です。調査では、縄文時代の土器や石器が出土しました。その数は少量ではありましたが、確かに縄文時代に活動が営まれていたことを示しています。大規模な遺跡だけでなく、折渡遺跡のような遺跡にも目を向け、その成果を積み上げていくことこそが、地域の歴史を復元していく上で重要なことであります。

今回の調査が無事に終了できましたことは、事業主体であります柏崎リゾート株式会社、ならびに工事施行責任者であります株式会社植木組のご助力の賜物と思っております。また、雨の日も作業をいとわず参加していただいた、柏崎市シルバー人材センターの会員の皆様ならびに調査員各位、そして本事業に格別なるご助力とご配慮をいただいた新潟県教育委員会の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成8年3月

柏崎市教育委員会

教育長 相澤陽一

例　　言

- 本報告書は、新潟県柏崎市大字久米字折渡地内に所在する折渡遺跡の発掘調査の記録である。
- 本事業は、グラン・アセル（旧「（仮称）柏崎ゴルフ俱楽部」）建設事業に関連する進入道路造成事業に伴い、柏崎リゾート株式会社から柏崎市が委託を受け、柏崎市教育委員会が事業主体となって発掘調査を実施したものである。
- 発掘調査は、平成7年4月28日から同年6月14日まで現場作業を実施し、その後平成8年3月31日まで整理作業及び報告書作成作業を行った。現場作業は、柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受けて実施し、整理・報告書作成作業は、柏崎市西本町3丁目喬柏園内社会教育課遺跡調査室において行った。また現場作業は、社会教育課職員及び遺跡調査室のスタッフを調査員とし、整理・報告書作成作業は、職員（学芸員）を中心に、遺跡調査室のスタッフで行った。
- 発掘調査によって出土した遺物は、注記に際し遺跡名を「折」と略し、グリッド名や遺構名および層序等を併記した。
- 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（社会教育課遺跡調査室）が保管・管理している。
- 本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、編集は斎藤が行った。
第I章・第II章・第III章・第IV章第1項・第V章……………斎藤幸恵
第IV章第2項……………中野　純
- 本書掲載の図面類の方針は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。
- 発掘調査から本書作成までは、事業主体である柏崎リゾート㈱並びに工事施行責任者㈱植木組からは数多くのご協力とご理解を賜った。またこのほかにも多大なご助力とご協力並びにご教示等を賜った。
記して厚く御礼を申し上げる次第である。
(五十音順・敬称略)

川又昌延・乗田瑞穂・箕輪一博・柏崎市立博物館・柏崎市立図書館・新潟県教育庁文化行政課

調査体制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 渡辺恒弘（～平成7年10月29日）
相澤陽一（平成7年10月30日～）

総　括 西川辰二（社会教育課長）
管　理 坂口達也（社会教育課長補佐兼文化振興係長事務取扱）
庶　務 宮山　均（社会教育課社会教育係主査）
調査指導 品田高志（社会教育課文化振興係主査学芸員）
調査担当 中野　純（社会教育課文化振興係学芸員）
調査員 斎藤幸恵（社会教育課文化振興係学芸員）
渡辺富夫（社会教育課文化振興係嘱託）
堀　幸子（社会教育課文化振興係遺跡調査室）

現場作業スタッフ
植木房吉・大國信一・大橋　勇・北原英男・栗林　稔・五位野八重子・駒形武雄
品田喜助・鈴木喜美子・鈴木京子・関矢愛子・牧野　鼎・目崎　忠・矢島末吉
矢代清英・矢代春雄・吉田雄二
(以上、柏崎市シルバー人材センター会員)

整理作業スタッフ
帆刈敏子（社会教育課文化振興係嘱託）
村山英子（社会教育課文化振興係嘱託）
竹井　一・黒崎和子・萩野しげ子・赤沢フミ・隨口昭子・高塩加代子・伊藤啓雄
(以上、遺跡調査室)
安達厚子（遺跡調査室・～平成7年5月31日）

目 次

I 序 説	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 発掘調査の経過.....	2
II 遺跡の位置と環境.....	3
1 地理的環境.....	3
2 歴史的環境.....	3
III 遺跡の概要	5
1 折渡遺跡概観.....	5
2 調査区とグリッドの設定.....	5
IV 遺構と遺物	7
1 遺構.....	7
1) 分布と概要.....	7
2) 遺構各説.....	7
a 倒木痕 b 根痕	
2 遺物.....	10
V 総 括	11
報告書抄録.....	卷末

図 版 目 次

図 面

- 1 折渡遺跡グリッド図
- 2 折渡遺跡全体図
- 3 SX2・3
- 4 SX4・6
- 5 SX7・SX8・SX9
- 6 SX10～SX14

写 真

- 7 折渡遺跡1 折渡遺跡とその周辺
- 8 折渡遺跡2 a・b. 遺跡遠景
- 9 折渡遺跡3 a・b. 遺跡近景
- 10 折渡遺跡4 a・b. 遺跡近景(完掘)
- 11 折渡遺跡5 a・b. 作業風景
- 12 折渡遺跡6 a・b. 作業風景
- 13 折渡遺跡7 a～c. 土層断面
- 14 折渡遺跡8 a・c. 土層断面 b. 完掘
- 15 折渡遺跡9 a・b. 土層断面 c. 完掘
- 16 折渡遺跡10 a～c. 土層断面
- 17 折渡遺跡11 a～e. 調査区壁土層断面
- 18 折渡遺跡12 a. 出土遺物(発掘調査) b. 出土遺物(確認調査)
- 19 折渡遺跡13 a・b. 出土遺物(確認調査)
- 20 折渡遺跡14 a. 遺跡見学風景 b. 集合写真

挿 図 目 次

第1図	柏崎平野地形分類図	/4	第3図	折渡遺跡基本層序	/6
第2図	別保盆地北部の地形と遺跡	/4	第4図	折渡遺跡出土遺物	/10
			第5図	倒木痕の倒木方向模式図	/12

表 目 次

第1表	折渡遺跡遺構観察表	/8～9
-----	-----------	------

I 序 説

1 調査に至る経緯

折渡遺跡は、柏崎市街地から南へ約9kmにある久米地区東部の丘陵内、柏崎市大字久米字折渡地内に存在する。黒姫山から北に派生する丘陵上、別保盆地の北東に位置し、標高は約84mである。

折渡遺跡は、当初三ツ子沢遺跡として知られていた〔柏崎市史編さん委1987〕が、三ツ子沢遺跡とは別地点の折渡遺跡として昭和58年に新たに周知化された。

当該地にゴルフ場の造成計画が浮上したのは、平成2年である。平成2年6月15日付で、計画予定地内約66.9haにおける埋蔵文化財の所在確認依頼書が、(株)経済界エージェンシーから柏崎市教育委員会(以下、「市教委」と省略)に提出された。この依頼に基づき、市教委は、平成2年7月31日に第1回現地踏査を実施した。当該計画地内には、周知の遺跡として折渡の塚群・折渡遺跡・三ツ子沢遺跡が存在しており、まずこれらに対して踏査を行った。この結果、折渡の塚群全てが市道拡張用地内に含まれることが判明したが、その後の計画変更により開発区域から除外された。平成2年12月26日に行われた第2回現地踏査は、開発区域内に未周知の遺跡が存在する可能性が新潟県教育委員会(以下、「県教委」と省略)から指摘されていたため、開発区域全域に及ぶものであった。この時確認されたのが長峰の塚であるが、造成内からははずれており、協議により現状保存となった。この2回の踏査により、造成事業で影響を受ける遺跡が折渡遺跡・三ツ子沢遺跡であることが判明し、平成3年6月13日付で、2遺跡に係る文化財保護法第57条の2による土木工事等の届出がなされた。しかし、両遺跡とも山林内にあり実態・範囲ともに不明であったため、範囲及び内容を確認するための確認調査を実施するよう県教委から指導があり、確認調査が実施された。確認調査が実施されたのは、平成3年11月18日~22日・11月26日~12月16日である。この結果、折渡遺跡からは遺構は確認できなかったが、縄文時代の遺物が検出され、三ツ子沢遺跡では石器炉等の遺構と遺物の存在が確認された〔柏崎市教委1992〕。

この結果を受けて協議がなされ、進入道路部分に存在する折渡遺跡以外は造成内からははずれていたため、調査対象から除くことになった。これにより、平成4年2月27日付け教文第535号で県教委から(株)経済界エージェンシー宛に、折渡遺跡については事前に発掘調査を行うよう指導がなされた。その後、平成5年7月22日付で、柏崎リゾート㈱から、進入道路に接続する広域農免農道の計画などにより、進入道路の法線が変更された旨の連絡があった。この変更後の法線は、確認調査地点とは一部ずれるものであったが、遺跡範囲内であり、本発掘調査を行うことで協議が成立した。その後、周辺では平成6年9月13日で仲島の塚が新たに発見され、周知化されたが、これは調査対象区域外であった。

平成7年に入ってから行われた協議では、本発掘調査を平成7年5月8日~7月15日の期間で実施することとなった。文化財保護法第57条の2の規定に基づく土木工事等の届出は、すでに平成3年6月13日付でなされていたため、平成7年4月7日付で同法第98条の2に規定に基づく発掘調査の通知を文化庁長官宛に提出した。本発掘調査は、平成7年4月28日に機材搬入を行い、5月8日から作業員を投入、本格的な調査を開始した。

2 発掘調査の経過

発掘調査の現場作業は、平成7年4月28日の機材搬入から同年6月14日の調査終了まで、延べ22日間にわたって実施した。調査面積は1,713.94m²、作業員延べ228.5人、調査員・調査補助員延べ88人であった。

4月28日、機材搬入を行った。平成3年の確認調査区域と今回の調査区域が異なっていたため、5月1日には、調査区の土層を把握する目的で、重機によって、任意に第1～6トレンチを発掘した。顕著な遺物包含層は認められず、地表から遺構確認面まで約60cmほどであることを確認した。この時、第1トレンチから、凹痕のある磨石と、縄文時代後期前葉と思われる土器片が出土している。

5月8日、作業員15人が現場に集合、本格的な調査に入る。重機による表土剥ぎを進めるが、午後になつて、5月1日のトレンチ発掘の際に地山と判断した黄褐色土は第V層であり、遺構確認面（第VI層）までは表土から100cmほどになることが判明した。このため、除去し足りなかった表土を明日再び掘削し直すこととなった。翌日はS X 1が確認された。人為的掘り込みとは考えがたく、土層観察のためにベルトを残して発掘するが、表土から10cmほどの深度しかなく、第VI層が入り込んだものと考えられた。表土から遺構確認面までの深度は、E-2グリッド付近から徐々に浅くなり、80cmほどになった。5月10日は、表土剥ぎの際に、第IV層から打製石斧が1点出土した。Eグリッド付近でS X 2～4を確認し、ベルトを残して発掘を開始した。S X 3は調査区壁面にかかっていたため、第II層堆積時に倒木したものであることが分かった。5月12日までにHグリッド付近まで遺構確認が進んだため、調査区の三分の一を終了したことになる。5月前半は五月晴れの日が続いたが、中旬から後半は雨がちの日が多く、現場も1日中稼動できない日があった。5月15日は、調査区の脇の林に残っている切り株を利用して原点移動を行い、この日から遺構の土層観察図面の作成を始めた。16日までには調査区の約半分まで表土剥ぎを終了した。このころ、現場内を狸や兎が横断する姿がよく見られるようになった。18日はS X 5～8を確認し、遺構確認作業と併行して発掘を始めた。S X 6は、調査区壁の観察から、第IV層群堆積途中に倒木したことが分かった。当初の想定よりも厚い堆積であったため、進捗状況に遅れをきたしていた表土剥ぎは、道路法線の延長で、あと30m程度を残すのみとなった。24日には、柏崎市立別保小学校の郷土探検クラブに所属する児童6名と顧問の先生1人が遺跡見学に訪れた。25日、表土剥ぎが終了し、Qグリッド付近の調査区隅に、深さ2mほどの基本層序観察用の深掘り地点を設けた。遺構は、S X 12・13・14を確認した。5月27日～6月6日まで現場を休止し、6月7日から再開することとなったが、この間、道路のセンターライン上に、10mグリッドの杭を設定し、各杭の国家座標数値を計測した。6月7日は、調査区全体の清掃を行うとともに未調査であったS X 12・13を完掘した。8日、全体写真を撮影、調査区壁の土層図を作成する。9日、全体写真撮影後、作業員の解散式を行った。12～14日に平面図・地形測量図を作成し、6月14日には別保小学校の郷土探検クラブが再び来跡した。その日のうちに機材を撤収し、現場作業を終了した。

出土遺物や調査図面作成等の報告書作成作業は、平成8年1月から本格的に行つた。

引用参考文献

柏崎市教育委員会 1992 「W 久米遺跡群」『柏崎市の遺跡Ⅰ』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第16)

柏崎市史編さん委員会編 1987 「三ツ子沢遺跡」『柏崎市史資料集 考古篇Ⅰ』

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

柏崎平野概観 新潟県の中央西部に位置する柏崎平野は、鶴川と鮎石川及びその支流により形成された臨海沖積平野である。平野部は米山・黒姫山・八石山を頂点とする山地や東頸城丘陵によって囲まれ、北西部を日本海に開けている。沿岸には荒浜砂丘があり、その後背地は湿地性の低地となっており、これらを取り巻く丘陵縁には、中・高位段丘が分布する。この柏崎地域は、鶴川・鮎石川によって東部・中央部・北西部の3地域に分けられる。東部は八石山を頂点とした向斜軸に沿った丘陵地帯、西部は米山を主体とした山地で、現在も隆起を続けている。そして折渡遺跡の存在する中央部は、黒姫山を頂点とし、北へ傾斜する丘陵が連なる地域である。

別俣盆地と折渡遺跡 折渡遺跡の存在する別俣郷は、盆地状の地形を呈し、地形的にまとまりを見せていて、北部と南部では大きくその景観を異にしている。折渡遺跡はその北部の段丘上に位置し、南部では縄文時代の遺跡は現在確認されていない。この別俣盆地の北部で顕著な段丘状の地形は、古別俣湖が上条芋川及び廻谷峠から流出することによって形成されたものと考えられている〔柏崎市教委1992〕。

2 歴史的環境

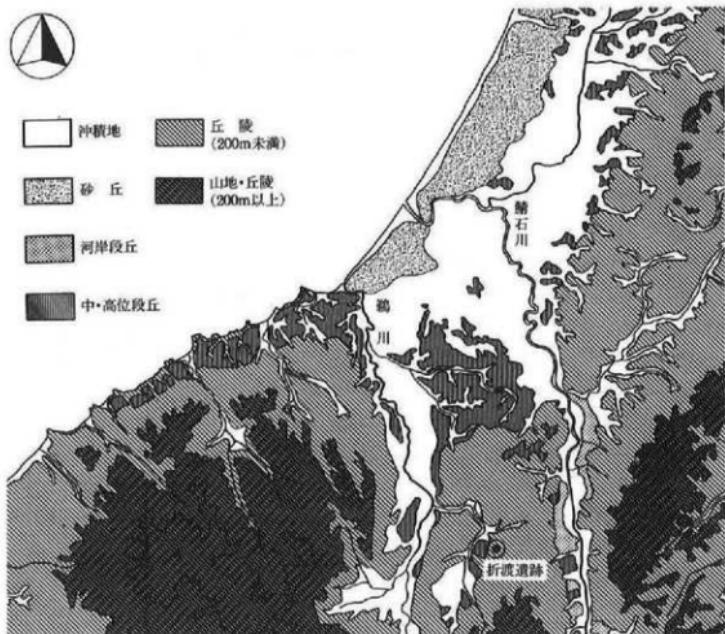
折渡遺跡で確認された遺物は、縄文時代の土器・石器であった。ここでは、折渡遺跡周辺の縄文時代の遺跡をはじめとして、別俣郷の遺跡について概観する。

縄文時代 別俣盆地では、北部と南部で大きく景観が異なっている。縄文時代の遺跡が確認されているのは北部であり、折渡遺跡と三ツ子沢遺跡である。折渡遺跡の北東には、三ツ子沢遺跡が存在する。平成3年に確認調査が行われており、縄文時代の石器群が確認され、中期後半に比定できる土器片が出土している〔柏崎市教委1992〕。別俣郷ではこの2件以外に縄文時代の遺跡が確認されておらず、鶴川沿いには多く確認されていることから、両地区の様相差が看取できる。

近世 折渡遺跡の周辺には、折渡の塚群や仲島の塚等の塚が、尾根筋に多く分布している。いずれも築造年代は明確ではないが、中世末～近世のものと考えられ、その性格も不詳である〔品田1992〕。『柏崎市伝説集』〔柏崎市教委1972〕には、久米のどの塚のことを指すのか定かではないが、「六部塚」として、「諸国を巡ってきた六部が穴を開けて中に入り、柿を食いながら鉦をたたき行をしたという。(中略) 今は小高い山になっている」という六十六部聖に関連する伝説が掲載されている。しかし、塚には、境界觀念をより強く打ち出した、「標」としての機能も付与されていたものもあると考えられ〔品田1992〕、久米に見られる塚(群)が、具体的にどのような目的で築造されたのかは明かではない。

引用参考文献

- 柏崎市教育委員会 1972 『柏崎市伝説集』
柏崎市教育委員会 1992 『IV 久米遺跡群』『柏崎市の遺跡I』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第16)
品田高志 1992 「新潟県における塚(群)研究の現状と課題」『新潟県考古学談話会会報第10号』 新潟県考古学談話会



第1図 柏崎平野地形分類図 (1:150,000)



第2図 別侯盆地北部の地形と遺跡

III 遺跡の概要

1 折渡遺跡概観

遺跡概観 折渡遺跡は別保郷の北西部の段丘上に立地し、標高80m前後である。遺跡は標高約72~87mの尾根上に立地しているが、この地点の段丘は標高約72~76mの下段と82~86mの上段に分かれており、上下二段に亘って遺跡の広がりが認められる。今回発掘調査を実施したのは、その上段部分にかかる進入道路範囲で、調査対象面積は約1,800m²である。

今回の発掘調査では、積極的に縄文時代の所産であると考えられる遺構は検出されず、倒木痕や根痕が確認されただけで、遺物は縄文土器片や打製石斧・磨石などが出土した。確認調査時には、調査範囲の中央部で縄文後期前葉が、東側の調査区域最高部では縄文中期前葉の遺物が多く出土していたため、この地点が遺跡の中心であろうと考えられていたが〔柏崎市教委1992〕、今回も遺物の出土・表採地点は調査区の東部へ中央部にかけてあり、試掘調査と同様の結果となった。しかし、この地点で遺構が確認されなかつたことは、折渡遺跡を縄文集落と仮定した場合、その周縁部を発掘したことになる。

基本層序 折渡遺跡の基本層序は、第3図の通りである。調査区内では、倒木痕が調査区壁にかかっている部分と、それ以外の調査区壁、特に南西端の深掘り地点で基本層序を確認している。その結果、基本層序は、確認した層まで第I層~第X層に分層できることが分かった。遺構確認面は第VI層である。縄文時代の遺物は、主に第IV層と第V層から出土している。なお、S X 1、S X 5は、窪み状の自然地形に第VII'層が堆積したものであった。

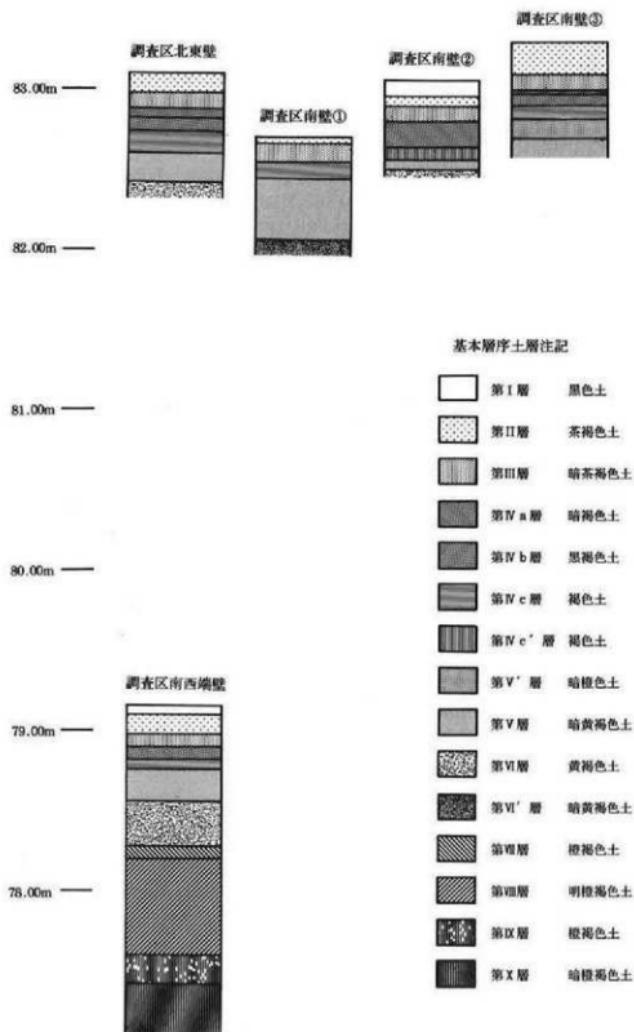
2 調査区とグリッドの設定

調査区は、図版1に示した通りである。進入道路のセンター杭を基本に、10m×10mの大グリッドを設定し、その中を2m×2mの小グリッドに分け、遺物・遺構の記録を行った。それぞれのグリッド杭に対応する国家座標値は、以下の通りである。

C 杭	X=142654.484	Y=9041.763	K 杭	X=142680.724	Y=8966.189
D 杭	X=142657.764	Y=9032.316	L 杭	X=142684.004	Y=8956.742
E 杭	X=142661.044	Y=9022.869	M 杭	X=142687.284	Y=8947.295
F 杭	X=142664.324	Y=9013.423	N 杭	X=142690.564	Y=8937.848
G 杭	X=142667.607	Y=9003.976	O 杭	X=142693.844	Y=8928.402
H 杭	X=142670.884	Y=8994.529	P 杭	X=142697.124	Y=8918.955
I 杭	X=142674.164	Y=8985.082	Q 杭	X=142700.404	Y=8909.508
J 杭	X=142677.444	Y=8975.635			

引用参考文献

柏崎市教育委員会 1992 「IV 久米遺跡群」『柏崎市の遺跡 I』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第16)



第3図 折波遺跡基本層序 (1 : 30)

IV 遺構と遺物

1 遺構

1) 分布と概要

今回の発掘調査では、積極的に縄文時代の遺構と考えられるものは検出されず、倒木痕が11基、根痕が2基検出されただけである。そのため、本節では、これらの落ち込みについて述べたい。SX1とSX5は、自然地形に第VI'層が地積したものと判断されたため、土層図等は作成していない。平面形はいずれも不定形である。倒木痕の分布はSX2~4、SX7・8・9・11、SX10・12と、大きく3つのまとまりがあり、この他にSX6、SX13、SX14が点在している。

2) 遺構各説

ここでは、今回検出された落ち込みを倒木痕と根痕に分類して報告する。前者は文字通り木が倒れた痕であり、後者は倒れた痕跡が確認できない、木根による土の攪乱と思われるものについて用いた。

a 倒木痕

倒木痕と考えられるのは、SX2b~4・6~9・11~14である。これらを平面形の大きさで分類すると、比較的小形のSX2b・9・11~13と、大形のSX3・4・6~8に分かれる。深度では、SX7・13のように30cm以下のもの、SX9・11・12のような40cm程度のもの、それ以外の60cm以上100cm未満の3つに分けられる。倒木方向は、南東方向が3基、西方向が1基、東方向が1基、北東方向が1基、北西方向が1基、北方向が1基、東西いずれかの方向に倒れたものが2基、不明が1基である。以下は、およその分布ごとに倒木痕の概要を述べる。

SX2a・b、SX3、SX4は、E~Fグリッドにかけてややまとまって点在する一群である。SX2a・bは、E~3グリッドに位置する。SX2aの方がSX2bより新しい。SX2bの覆土は8層に分けられる。攪乱を受けている基本土層から、第IV層堆積時に倒木したものと考えられる。倒木方向は南東である。SX3は、調査区壁にかかっているため、正確な規模などは不明である。覆土は17層に分けられ、調査区壁の土層観察から、第II層堆積時に倒木したことが分かり、この調査区内ではもっとも新しい倒木痕と考えられる。遺物は、混入と思われる縄文土器が若干出土しており、倒木方向は南東である。

SX4は、E~F~2グリッドにわたって存在する、今回の調査範囲ではもっとも大きな倒木痕である。覆土は7つに分層され、第III~IV層堆積時の倒木であると判断される。倒木方向は西である。縄文土器が若干出土している。

これらの西方に位置するI~2グリッドに、SX6が存在する。これもSX3同様、調査区壁にかかっていたため、正確な平面形は不明であった。覆土は15層に分けられる。第III層堆積時に倒木し、倒木方向は東である。縄文土器が少量出土している。

J~Kグリッドには、SX7・8、SX9、SX11がややまとめて存在する。SX7・8は、どちらも倒木痕であるが、切り合い関係からSX7はSX8より古い。SX7の覆土は4層に分けられ、深度は21cmとSX8に比べてかなり浅い。倒木方向は明確ではないが、東西いずれかの方向と思われる。縄文

第1表 折渡遺跡遺構観察表（ローマ数字は基本層序を示す）

遺構No.	グリッド	径(cm)	深度(cm)	層	注記	備考
1	—	—	—	—	—	自然地形
2 a	E-3	236×228	60.5	1	暗褐色土。	根底・SX2bより新
2 b	E-3	163×98	16	2	黄褐色土。第IV層に相当	倒木底・SX2aより古
				3	暗黃褐色土。第V層に相当	倒木方向（南東）
				4	褐色土。第VI層に相当	
				5 a	暗褐色土。	
				5 b	暗褐色土。第5 c層の混入多い	
				5 c	黒褐色土。若干第2層が混入	
				5 d	褐色土。第VI層と第3 c層の混合	
3	E-2	277×246	82	1 a	暗褐色土。第II層に類似	倒木底・倒木方向（南東）
				1 b	暗褐色土。第II層に類似	縄文土器出土
				2	褐色土。	
				3 a	黒褐色土。第IV a層に相当	
				3 b	黒褐色土。第IV b層に相当	
				3 c	褐色土。第IV c層に相当	
				4	暗黃褐色土。第V層に相当	
				5	暗黃褐色土。第VI層に相当	
				6 a	赤褐色土。第四層に相当	
				6 b	暗赤褐色土。第6 a層に類似	
				6 c	明赤褐色土。第6 a層に類似	
				6 d	灰褐色土。第6 c層に類似	
				7 a	黒褐色土。第VI層を多量に含む	
				7 b	黒褐色土。第7 a層に類似	
				7 c	暗褐色土。	
				7 d	暗褐色土。	
				7 e	暗褐色土。	
4	E~F-2	468×291	78	1	暗黃褐色土。第三層に相当	倒木底・倒木方向（西）
				2	暗褐色土。第IV b層に相当	縄文土器出土
				3	暗赤褐色土。第V層に相当	
				4 a	黒色土。	
				4 b	黒褐色土。第2・3層の混入多い	
				4 c	褐色土。第VI層と第4 a層の混合	
				5	暗黃褐色土。第VI層に相当	
5	—	—	—	—	—	自然地形
6	I-2	350×164	69	1	褐色土。	倒木底・倒木方向（東）
				2	暗褐色土。	縄文土器出土
				3	暗褐色土。	
				4	褐色土。	
				5	褐色土。	
				6	黒褐色土。第IV b層に相当	
				7 a	暗黃褐色土。第V層に相当	
				7 b	暗黃褐色土。第VI層に相当	
				8	黃褐色土。第VI層に相当	
				9 a	暗赤褐色土。第四層に相当	
				9 b	赤褐色土。第VIII層に相当	
				10 a	黒褐色土。第9 a層が混入	
				10 b	暗褐色土。第三層が混入	
				10 c	褐色土。第V層が多く混入	
				10 d	黒褐色土。第9 a層が多量に混入	
7	J~K-2	257×218	21	9	暗黃褐色土。第VI層に相当	倒木底・SX8より古
				10	暗褐色土。近年の根痕による擾乱	倒木方向（東西いずれか）
				11 a	黒褐色土。	縄文土器出土
				11 b	暗褐色土。	
				1	暗黃褐色土。第VI層に相当	
				2	黒色土。近年の根痕による擾乱	
				3	暗黃褐色土。	
				4	暗褐色土。第四層に相当	
				5	明暗褐色土。	
				6 a	暗黃褐色土。第VI層に相当	
				6 b	黒褐色土。暗黃褐色土が少量混入	
				6 c	暗褐色土。暗黃褐色土が微量混入	
				6 d	黑色土。	
				7 a	黒褐色土。	
				7 b	暗褐色土。	
				7 c	暗褐色土。	

遺構No.	グリッド	径(cm)	深度(cm)	層	注記	備考
9	K-3	140×138	44	7 d 8 1 2 3 4 5	暗褐色土。 暗褐色土。 暗黃褐色土。第VI層に相当 暗黃褐色土。第3層が多く混入 黑褐色土。第VI層が少量混入 黃褐色土。第VI層が若干混入 黃褐色土。第VI層が若干混入	倒木痕・倒木方向(北東)
10	L-3	190×108	61	1 2 3 4 5	褐色土。 暗褐色土。しまりややあり 暗褐色土。しまりややあり 暗黃褐色土。	根痕
11	K-2~3	177×157	42.5	5 1 2 a 2 b	暗黃褐色土。第4層より暗色 暗黃褐色土。第VI層に相当 褐色土。第1層が多く混入 暗褐色土。第1層が少量混入	倒木痕・倒木方向(東西いずれか)
12	M-3	160×129	42	3 1 2 3 4	黃褐色土。第VI層に相当 黃褐色土。第V層に相当 黃褐色土。第IV b層に相当 黃褐色土。	倒木痕・倒木方向(北)
13	N-3	163×132	28	1 2 3	黃褐色土。第V層に相当 暗黃褐色土。第IV b層に相当 黃褐色土。	倒木痕・倒木方向(北西)
14	Q-2	-	-	1 2 3	明褐色土。第IV a層に相当 明橙褐色土。第VI層に相当 暗褐色土。第2層が混入	調査区壁面で検出された倒木痕 倒木方向不明

土器が出土している。S X 8は、S X 4に次いで平面規模の大きい倒木痕であり、深度も82.5cmとともに深い。覆土は14層に分けられ、第IV層堆積以前の倒木痕であることが分かる。倒木方向は南東である。

S X 9は、覆土が5層に分けられ、第IV層堆積時の倒木である。倒木方向は北東である。深度は44cmとやや深いが、平面形は小形である。S X 11の倒木方向は、東西いずれかの方向であり、明確ではない。覆土は4層に分けられ、第VI層堆積時に倒木したことが分かる。

S X 12~14はまとまりを持たず、調査区の西側に点在している。いずれも出土遺物は確認されなかった。S X 12はM-3グリッドに存在し、今回の調査ではもっとも小形の倒木痕である。覆土は4層に分かれ、第IV層時に倒木している。倒木方向は北である。S X 13はN-3グリッドに存在し、S X 7に次いで浅い倒木痕である。覆土は3層に分けられ、第IV層時の倒木痕であることが分かる。倒木方向は北西である。S X 14は調査区壁面で検出され、第VI層堆積以降、第IV層堆積時の倒木痕である。平面形・倒木方向ともに明かでない。覆土は3層に分けられる。

今回の調査で検出された倒木痕は、その分布と倒木時期・倒木方向が互いに一致するものは認められなかった。縄文土器が出土している倒木痕も存在するが、調査区壁で検出された遺物が第IV・V層から出土しているもの多いため、遺物は倒木の際に混入したものと考えられる。

b 標痕

標痕は、S X 2 a、S X 10の他にも、径が10cm程度で深度が5cm程度のものがいくつか検出されたが、それらは半蔵して確認しただけで、調査の対象から除外した。

S X 2 aは、E-3グリッドに存在するS X 2 bより新しい標痕である。覆土は1層で、暗褐色土である。深度は16cmと浅い。出土遺物は確認されなかった。S X 10は、L-3グリッドに存在する、深度が61cmの標痕である。覆土は5層に分けられ、ややしまりのある暗褐色土としまりのない暗黃褐色土を主体としている。出土遺物は確認されていない。

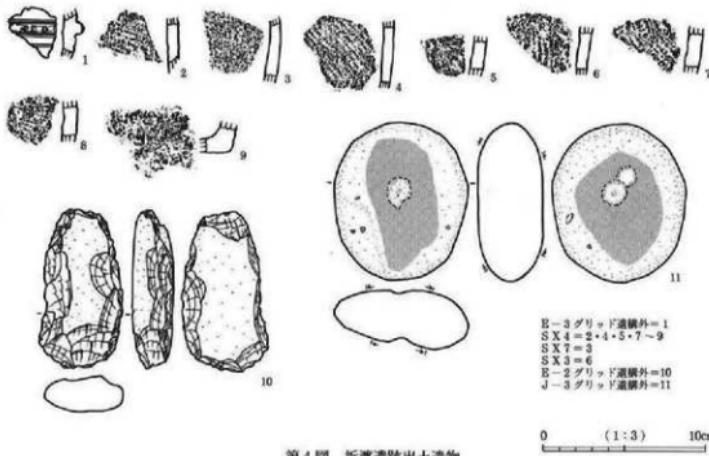
2 遺 物

土 器 類 今回の調査で折渡遺跡から出土した土器類は、全て縄文土器である。遺物量は概して稀薄といえ、大半が細片で、粗製土器が多くを占めていた。平成3年度に実施した確認調査時には、縄文時代中期前葉・後期前葉・晚期中葉に比定できる資料が出土しており、今回の調査で出土した土器類もほぼこの時期に対比可能であると推測される。なお、今回は出土遺物が極めて少量であったことから、補足資料として確認調査時の出土遺物を写真図版に掲載した。

第4図-1は、淡黄色を呈し、頸部には鎖状隆帯が施されている。隆帯の上端は粗雑な調整がされているが、下端は未調整のままとなっている。また、鎖状隆帯の下部には竹管状工具による平行沈線文が施文されている。鎖状隆帯の特徴等から、中期後葉～後期前葉に所属する資料と考えられる。2は浅黄色を呈し、LR斜行縄文を横位回転により描出している。3は赤褐色を呈し、器面の摩耗が著しいが、斜行縄文を施した痕跡が部分的に認められる。4・5はLR斜行縄文を横位回転によって描出し、淡黄色を呈している。6は浅黄色を呈し、縦位撚糸文(L)が施文されている。7はRL斜行縄文が縦位回転施文された資料である。色調はにぶい橙色を呈している。8は橙色を呈し、LR斜行縄文の施された資料である。9は胴部下半から底部にかけての資料である。胴部下半には、竹管状工具による平行沈線文が縦位に施されていることが認められる。

石 器 類 今回の調査で出土した石器類も少量で、5mm以下の剝片が大半を占めていた。石器類の種別も限られており、剝片以外では今回図示した資料がみられるだけである。土器類と同様に全て縄文時代に所属するものであるが、出土状況から土器との伴出関係は認められず、明確な時期判断は困難である。

第4図-10は凝灰岩製の打製石斧で、短冊形を呈している。刃部と基端部、および左右両端を作出するのみで、表裏両面に自然面を多く残している。11は安山岩製の凹石で、表裏両面に敲打による凹痕および磨痕が観察される。裏面の凹痕は、少なくとも二次に亘って形成されている。



第4図 折渡遺跡出土遺物

V 総括

はじめに 今回発掘調査が行われた折渡遺跡は、縄文時代の遺物が少量ながら確認されているが、積極的に縄文時代の所産であると考えられる遺構は検出されず、確認されたのは倒木痕および根痕であった。今回の調査は、遺跡の中心から逸れたと思われる内容ではあったが、その理由として、進入道路部分という狭く長い範囲での調査であったことが挙げられる。確認調査時にも、遺物はそれ程大量ではなく、遺構も検出されていない。このような結果から、確認調査時の所見では、一般的な集落とは異なる、陥し穴等の狩猟施設の存在が想定されている〔柏崎市教委1992〕。縄文時代の折渡遺跡を明かにしうる資料は豊かではない。今回調査された倒木痕は、基本層序上での倒木時期は判明したもの、それを実際の歴史的年代に対応していくにはまだ情報が不足しており、今回の調査結果のみでただちに折渡遺跡周辺の当時の自然環境を明かにすることができるわけではないが、以下、倒木痕に関して若干の観察を加えていきたい。

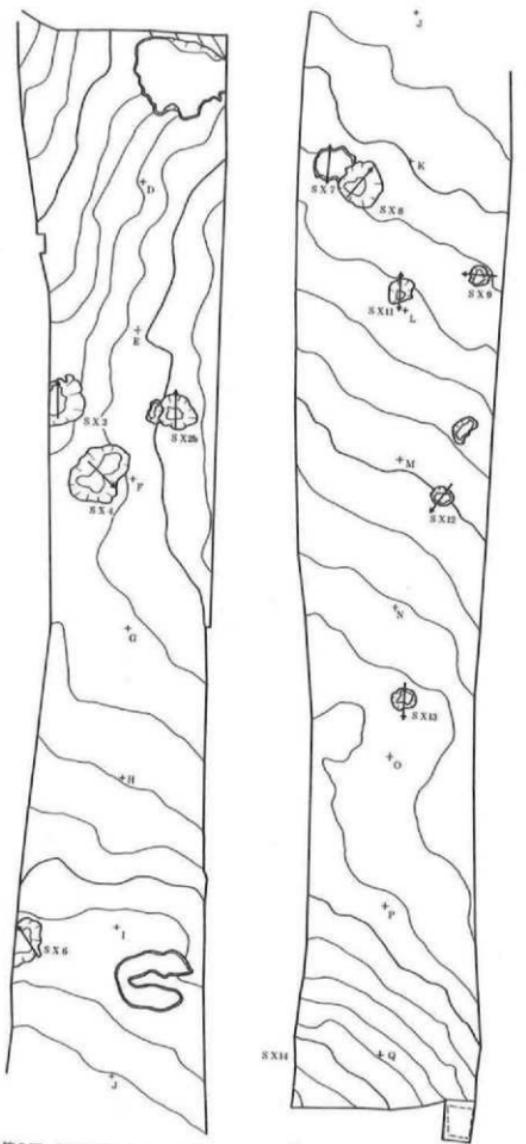
折渡遺跡における倒木痕 折渡遺跡で検出された倒木痕は、全部で11基である。中には調査区壁にかかって検出されたものもあり、平面規模が判明しないものも存在するが、大きく大形と小形のものに分けられる。このような平面規模及び深度の大小は、木の根の大きさと広がり・木の高さによるものと考えられる。土層の表面的観察のみでの判断は困難であるが、このような倒木の原因として考えられるのは、①枯死による自然倒木、②風雨雪等の自然環境による倒木、③人為的倒木、の3つが挙げられる。

倒木方向は、第5図に模式的に示した。その方向は分布とは一致していない。土層観察から、基本層序のどの段階で倒木したかということは判明しており、第II層：S X 3、第III層：S X 4・6、第IV層群：S X 2 b・8・9・12・13、第VI層：S X 11となっている。倒木方向は、同一の基本層序で考えても一致するものは存在しない。この倒木方向を決めるのは、風向きであったり、土の状態や地面の傾斜であろうと考えられるが、基本土層を観察する限りでは、当時の当該地付近が急斜面であったり、特にしまりのない土質であった痕跡は見受けられない。これらの倒木時期で、第IV層群堆積時に倒木した樹木が6本と多い。現在、第IV層の年代が判明しないため、第IV層堆積時の気象条件を考えることは困難であり、今後の自然科学的なデータの蓄積を待って判断したい。

おわりに 久米地区は、柏崎市域では山地に属しており、柏崎市街地とは天候が異なる場合がある。久米周辺の積雪量や降水量は市街地より多い。別郷郷は、盆地状の地形のため、柏崎市周辺で特有の強い季節風は幾分弱まるものの、折渡遺跡の存在する尾根上は、沢風が吹き上げる場所でもある。倒木痕は“風倒木痕”と呼ばれる場合が多いが、樹木個々の条件はもちろん、このような地形条件によってその痕跡の多寡が影響されることを考えられる。今後の資料の増加を待って、折渡遺跡の縄文遺跡としての性格付けは勿論のこと、このような自然の痕跡も考慮に入れてこの周辺一帯を考えていく。

引用参考文献

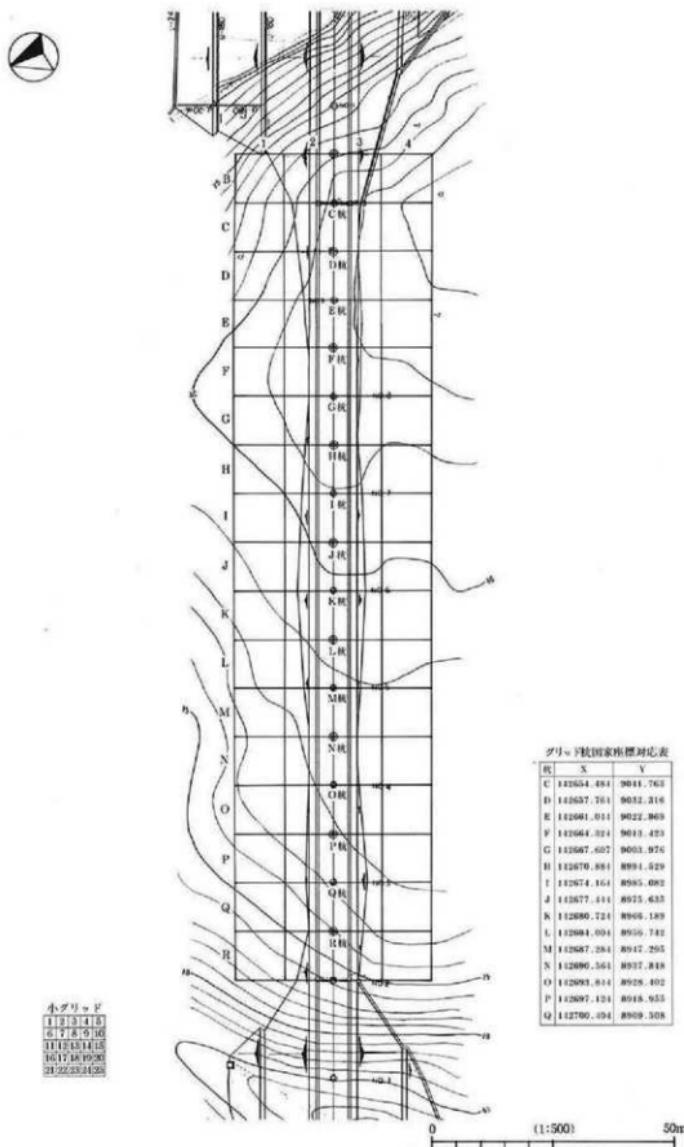
- 柏崎市教育委員会 1992 「IV 久米遺跡群」『柏崎市の遺跡I』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第16)
辻本嵩夫 1985 「第5第 倒木痕の再検討」『鶴町遺跡I』 八王子市鶴町遺跡調査団
能登 健 1974 「発掘調査と道路の考察—いわゆる「性格不明の落ち込み」を中心として」『信濃』26-3 信濃史学会



第5図 折渡遺跡における倒木痕の倒木方向

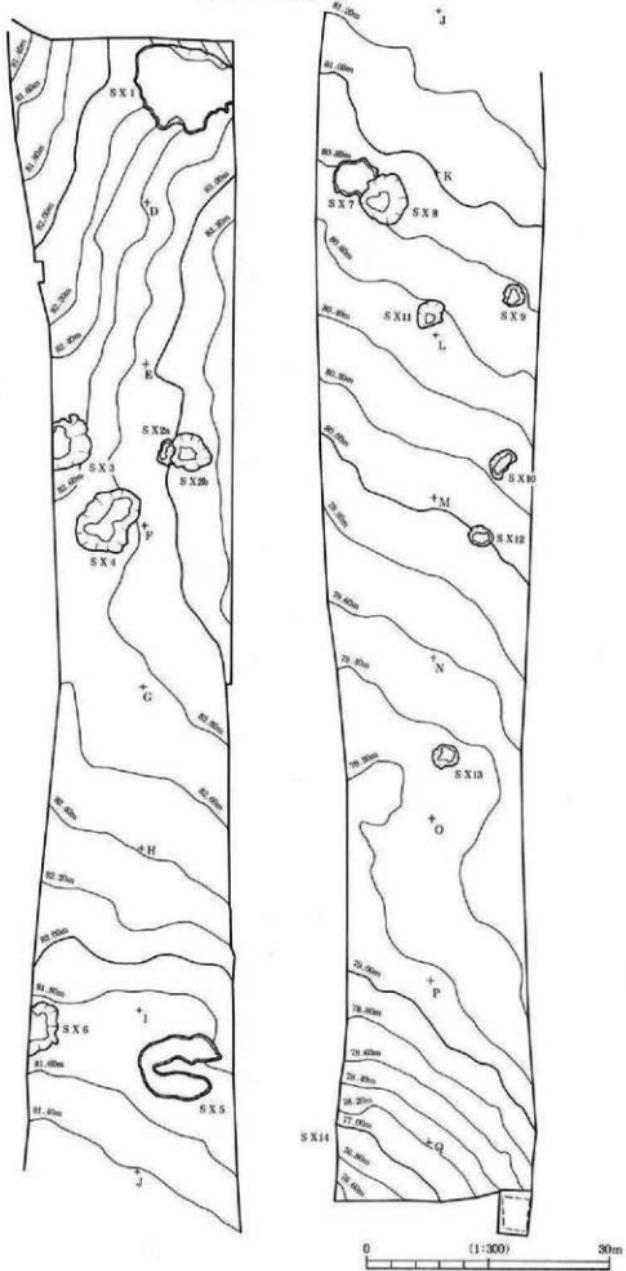
0 (1:300) 30m

折渡遺跡 グリッド図



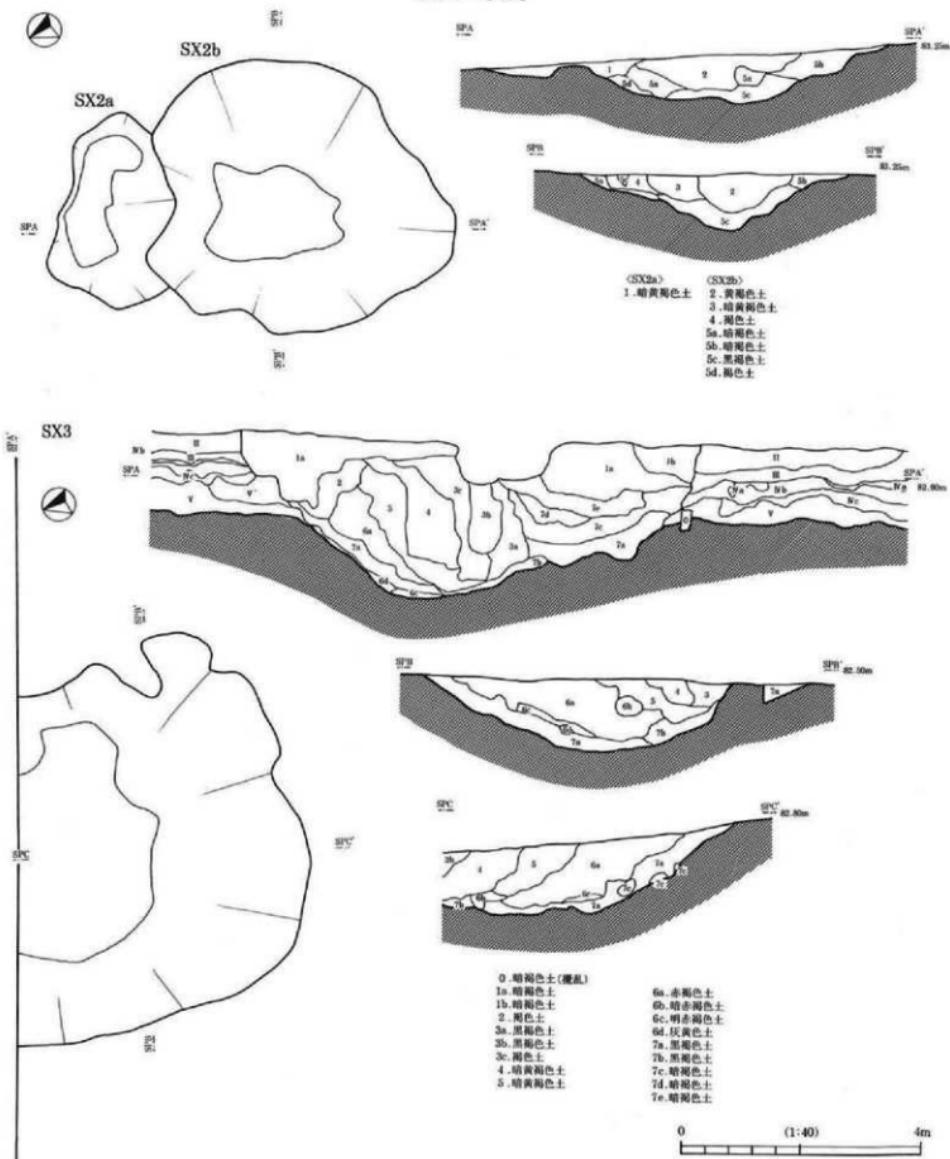
図版2

折渡遺跡全体図

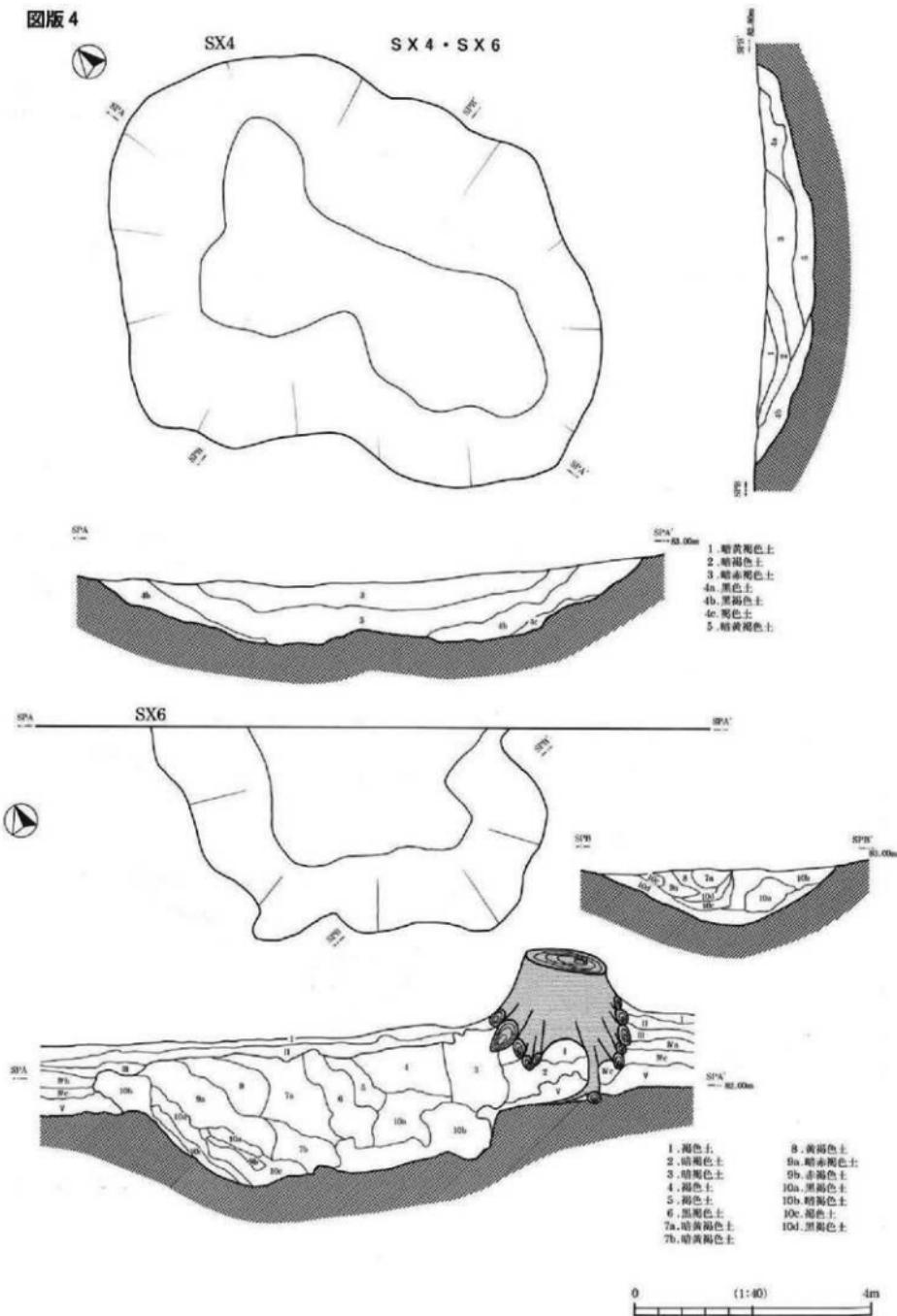


図版3

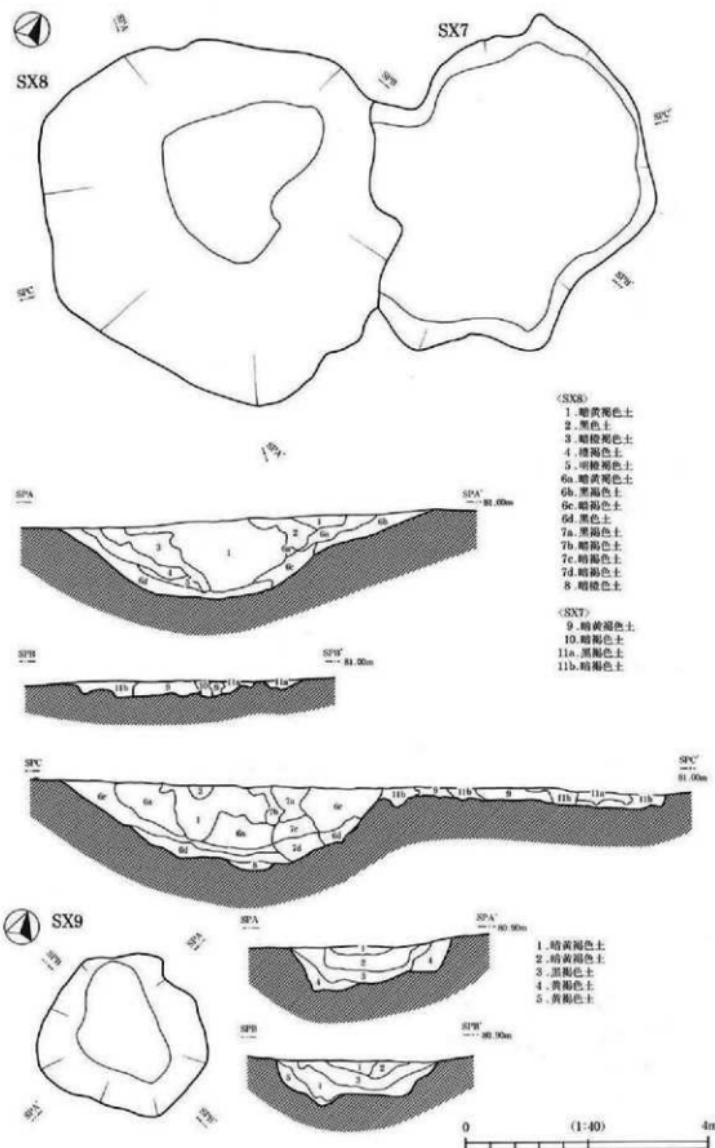
SX2・SX3



図版 4

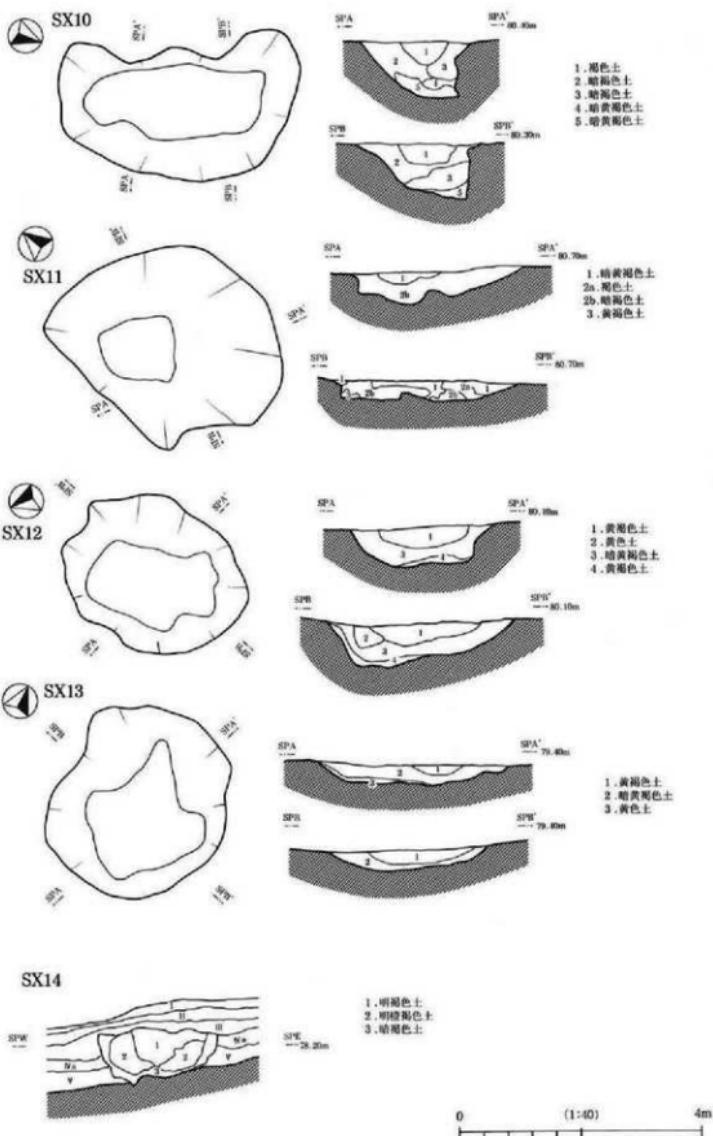


SX7・SX8・SX9

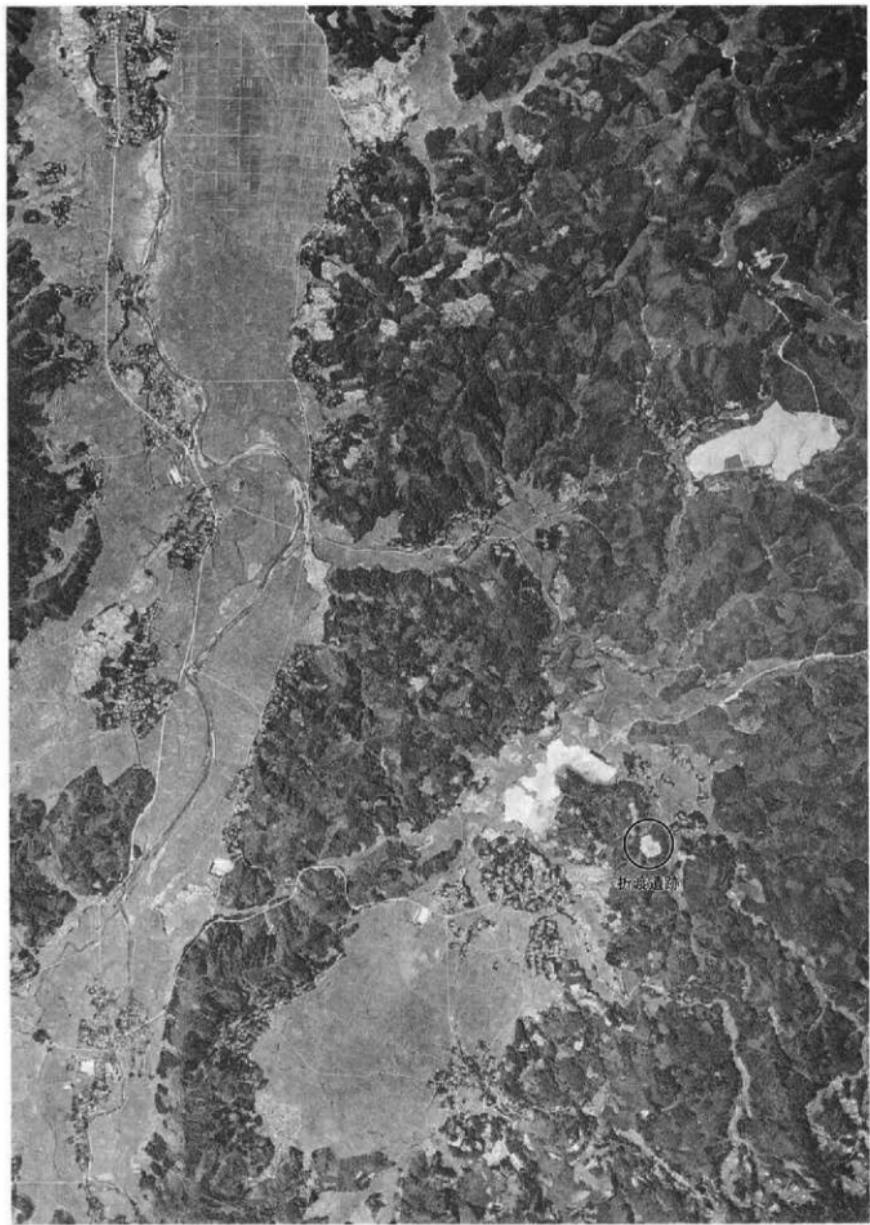


図版 6

S X10~S X14



折渡遺跡 1



折渡遺跡とその周辺

(1961. 6. 2撮影)

折渡遺跡 2



a. 遺跡遠景

(東から)



b. 遺跡遠景

(北から)

折渡遺跡 3



a. 遺跡近景

(南東から)



b. 遺跡近景

(北西から)

折渡遺跡 4



a. 完掘状況

(南東から)



b. 完掘状況

(西から)

折渡遺跡 5



a. 作業風景（遺構確認）

(北から)



b. 作業風景（遺構発掘）

(南から)

折渡遺跡 6



a. 作業風景

(南東から)

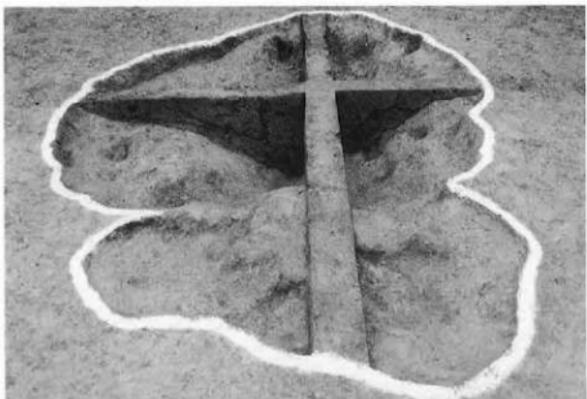


b. 作業風景

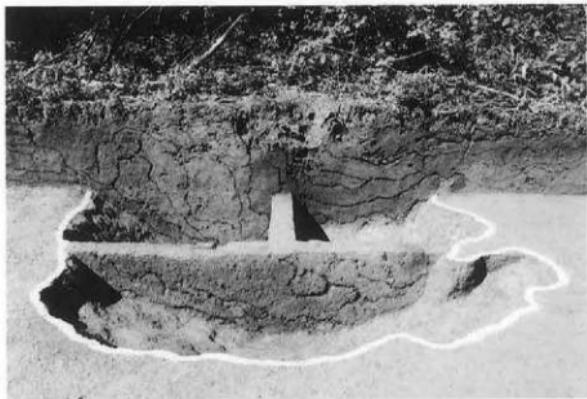
(東から)

折渡遺跡 7

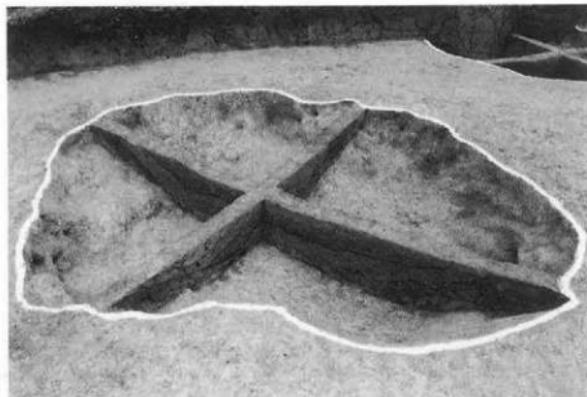
a. SX2a・2b 土層断面
(南西から)



b. SX3 土層断面
(南西から)



c. SX4 土層断面
(南から)



折渡遺跡 8



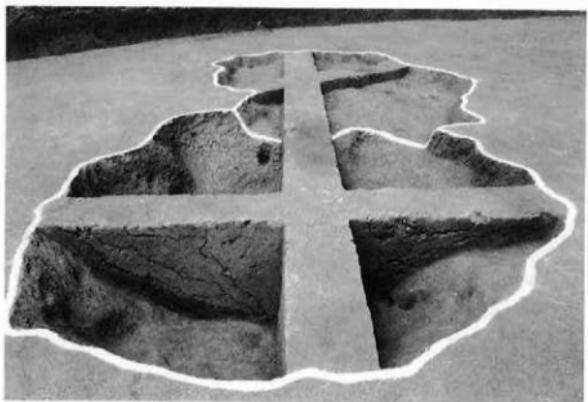
a. S X 6 土層断面

(南から)



b. S X 2a・2b・3・4 完掘

(南東から)

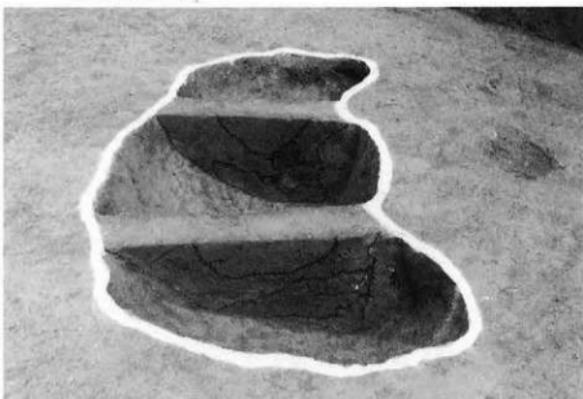


c. S X 7・8 土層断面

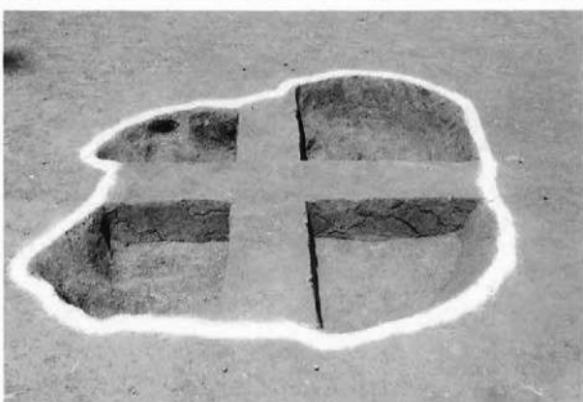
(西から)

折渡遺跡 9

a. S X 10 土層断面
(北西から)



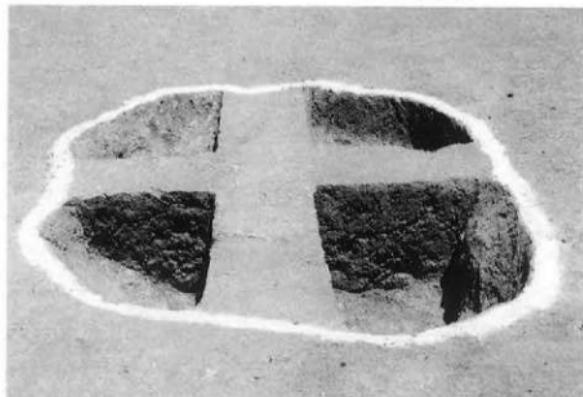
b. S X 11 土層断面
(南東から)



c. S X 7・8・11 完掘
(西から)

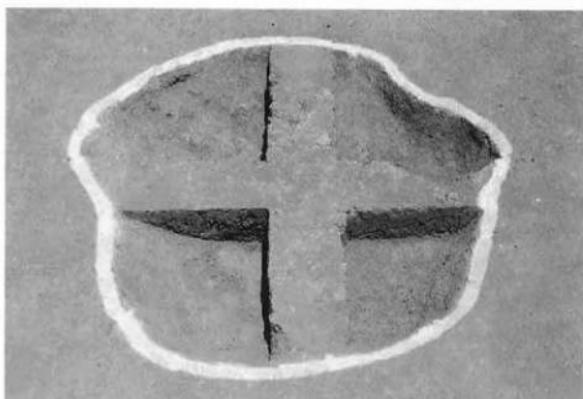


折渡遺跡 10



a. S X12 土層断面

(西から)



b. S X13 土層断面

(南西から)



c. S X14 土層断面

(南西から)

折渡遺跡 11



a. 調査区北東壁

(北から)



b. 調査区南壁①

(北東から)



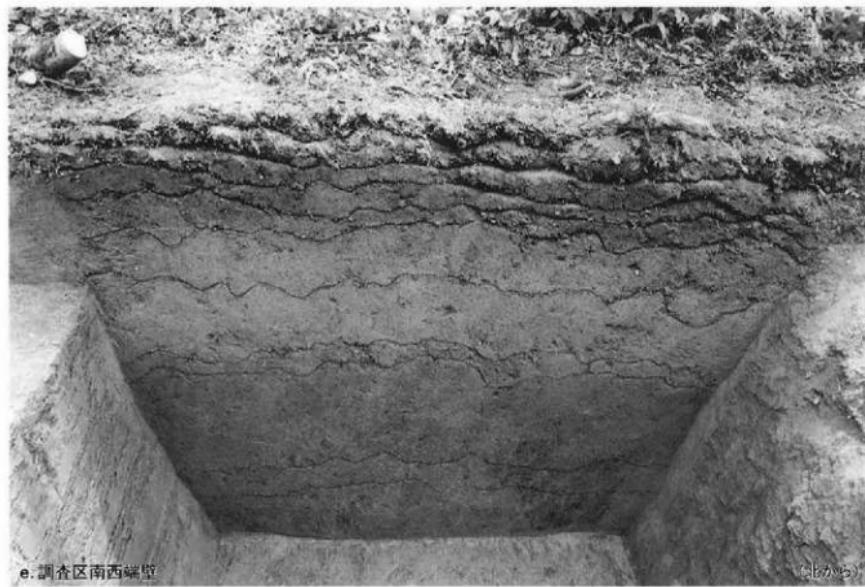
c. 調査区南壁②

(北東から)



d. 調査区北壁

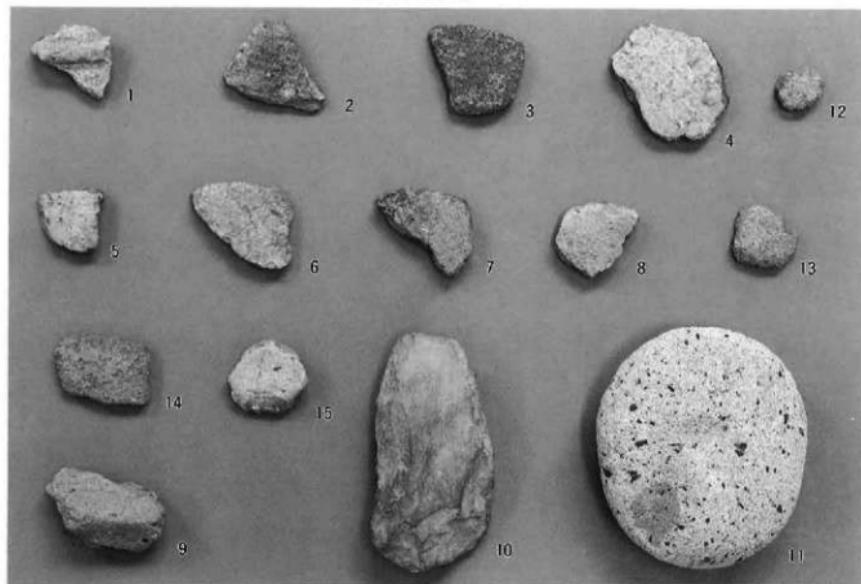
(南から)



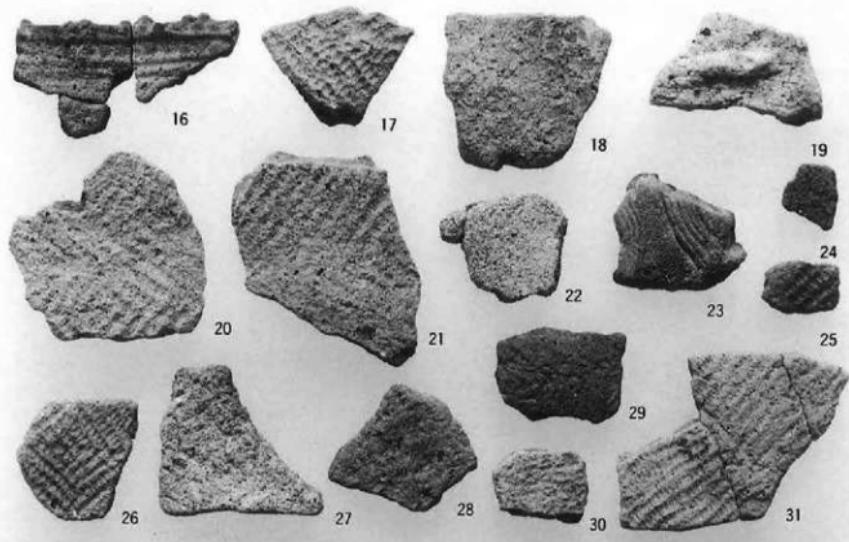
e. 調査区南西端壁

(北から)

折渡遺跡 12

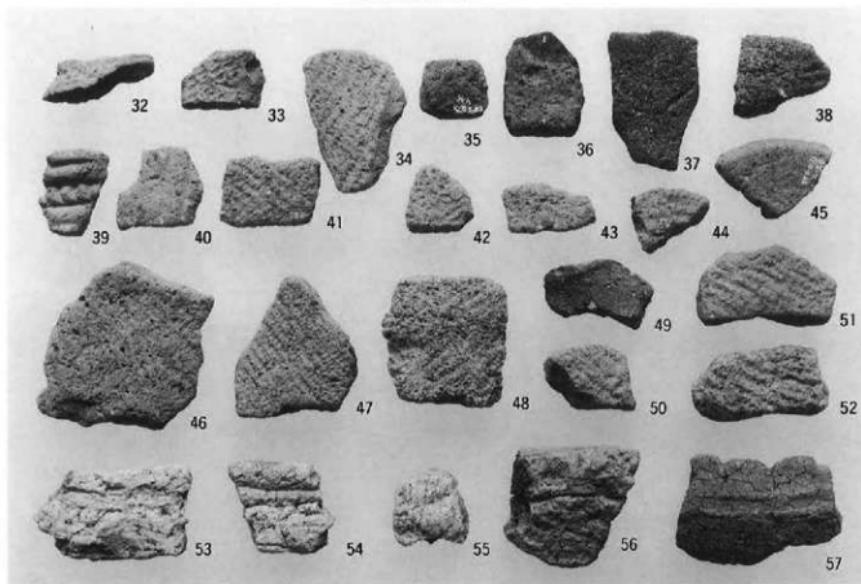


a. 出土遺物（発掘調査）

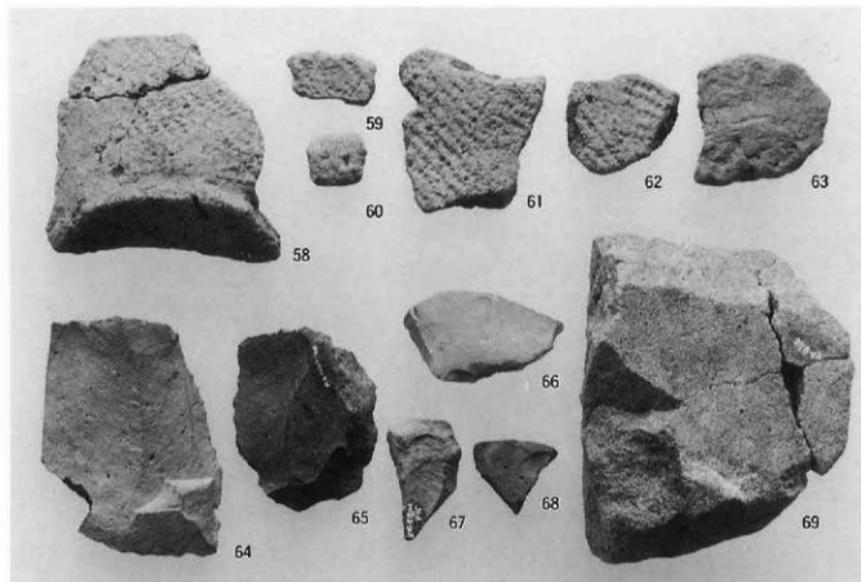


b. 出土遺物（確認調査）

折渡遺跡 13



a. 出土遺物（確認調査）



b. 出土遺物（確認調査）

折渡遺跡 14



a. 別俣小学校郷土探検クラブの遺跡見学会



b. 集合写真

報告書抄録

ふりがな	おりわたし							
書名	折渡							
調査名	柏崎市久米・折渡遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第24集							
編著者名	中野 純・斎藤幸恵							
編集機関	柏崎市教育委員会 社会教育課 遺跡調査室							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	945 新潟県柏崎市中央町5-50 TEL. 0257-21-2364							
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
折渡遺跡	新潟県柏崎市 久米	15205	331	37度 17分 82秒	138度 35分 90秒	19950428~ 19950614	1713.94m ²	ゴルフ場造成に伴う進入道路工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
折渡遺跡		縄文時代	倒木痕	縄文土器・石器				

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第24集

折 渡

— 柏崎市久米・折渡遺跡発掘調査報告書 —

平成8年3月28日 印 刷

平成8年3月29日 発 行

発 行 柏崎市教育委員会

新潟県柏崎市中央町5-50

印 刷 株式会社 柏崎インサツ